分教場の跡を訪ねて　その(七)

・深島探訪の記
・蒲江町立　深島小・中学校(現在休校)

高　司　良　恵
(会員佐伯市宇山区)

(一)　深島小・中学校の沿革

・明治四十一年　深島寺子屋式学校始まる
　教師　井沢千栄
・大正元年　深島学校新築
　教師　千田考二郎
・大正五年　深島教育のため佐伯町から高瀬琢治が赴任
・大正六年四月　蒲江小学校深島分教場開設
・昭和七年　高瀬琢治　教育功労者として記念碑が建立さる。
　渡辺久米蔵分校主任として二十六年間勤務　教え子は三百人位
・昭和二十一年　終戦直後　甲斐清作　三年八ケ月教鞭をとる
・昭和二十四年　蒲江中学　深島分校となる
・昭和二十六年　現在地に校地を移し校舎新築
・昭和三十一年　文部省指定研究校となる
　テーマ「併設校の生活指導」
　大がかりな研究発表会であった
・昭和三十四年十月　専任の学校長を迎え蒲江町立深島小・中学校として独立　離島学校として格別な助成・後援があった
・平成八年四月一日より休校
　現在小学校児童なし　中学生一名蒲江中心街に居住、蒲江中学校に通学

(二)　深島教育先駆者の足跡

・高瀬琢治先生
　むせかえるような夏草を、かきわけながら旧分教場の跡を訪ねた。無住の校長住宅は閉ざされたままだが、まだまだ立派であった。
　運動場の敷地の一角に、ひっそりと高瀬先生の記念碑

が、おい茂る雑草の中にあった。同行の林さん、矢野さんがみかねて、持参した鎌で汗びっしょりになって草を刈り記念碑の存在をはっきりさせた。

高瀬先生は、大正五年から大正九年までの五ケ年間、深島分教場主任として、学童教育に心血を注いだ。その先生を追慕して島の青年達が建設したものである。記念碑の文字も定かに読みとることができた。

高瀬先生は、安政六年堅田に生まれ堅田学校を振り出しに、長池・丹賀・梶寄・間越・日向泊・大越と主として分教場に勤務して、大正三年五月屋形島分教場主任として来任し、そして翌々大正五年深島分教場の主任として退職までの五年間、終始一貫辺地教育に捧げ尽した先生である。

高瀬琢治先生の碑
草刈りをする林・矢野会員

先生は大正十三年三月、病気のため佐伯町で死没した六十五才であった。

先生の薫陶を受けた深島の青年達の敬慕して止まない気持が、この記念碑から伝わってくる思いがする。私は記念碑をさわりながら自ら進んで辺地に赴き不利な諸条件を克服し、島民の先頭に立ち日夜深島教育に、専念された先生のお姿が偲ばれる。

深島をこよなく愛し島民の信頼と絆は、教育の原点、人間尊重の教育を自ら進んで実行された情熱には、ただただ感服させられた。現場教師にとって、とかく敬遠され勝ちな辺地勤務！なにかしら、すまない気持でいっぱいになる。ふと我にかえる。どこからともなくしきりに老鶯の啼く声が聞こえてくる。

・甲斐清作先生

終戦直後の世相混乱、学制改革、とりわけ食糧事情困難なこの時期に率先して、深島に赴き、深島教育に三年八ケ月教鞭をとられた甲斐清作先生は、数々の業績を積まれながらその記録「心のふるさと深島」という先生の

歌集には熱いおもいが綴られている。

・めぐらせる青垣山の岡の上に
　芽出度くたてり島の学び舎

・ははそばの母なつかしみあね妹
　荒海こしてたづね来にけり

当時、深島に行くのには、木立から畑ノ浦峠を木炭バスにゆられながら、くねくねと曲がった海岸のでこぼこ道を、楠本・河内・高山トンネル・淋しい高山海岸を経て蒲江町へそれから船便を求めて、一時間以上も波しぶきを浴びながら、一日がかりで深島に父や母を尋ねて行ったのではないだろうか。

辺地勤務のきびしさの一面を痛切に感じる。

・上鶴聡子さんに聞く、昭和四十一年から四十二年の一年間　（安心院町居住）

上鶴先生は、下堅田の出身で初任地が深島小学校であった。当時、深島小・中学校はあわせて生徒児童数は三十九人、教師は九人であった。小学校は複式で上鶴先生は、一・二年生の受持で十一人校であった。ほとんど学校の先生が新卒・中で女教師は上鶴小先生ひとりだった。学校の日・宿直は男の先生がやってくれたとのことだった。給食は、粉ミルクで中学三年生が交代でミルクを作っていた。蒲江から乾パンが送られてきていた。

深島の段々畑は、見渡す限り「いも畑」であった。島の人達はツワブキの花が咲き始めるのを目安に、いも掘りを始めたという。

電気は自家発電で、夕方六時から十時までと限定されていた。電話は島にひとつあって利用者は使用名簿に氏

名を記入していたが、使用回数と利用者の数が、一度もまちがいなかったという。

島の食事は、男の先生はまかないのおばさんが引き受けその家に、朝昼晩、食べに行っていたが、上鶴先生は下宿のおばさんが食事を作ってくれた。特に小アジで作る天プラ・カマボコの手作りの味は、おいしくて生涯忘れられない味だと話してくれた。

深島の交通便は、定期船がなく必要によって船をやとって往き来したという。

緊急事態・急患などの場合は島の人お互いが都合つけて舟を出し合って、蒲江におくり届けたという。この風習は現在も変りない。島中みんな親類といった感じで、わるいこともせず、子ども同志も大変仲がよかった。

運動会、祭り行事、学校行事など小・中合同・地域一体となって盛り上がり、とてもにぎやかであったという。私は話を聞きながら、十分にその様子が想像できた。遠足は行き場がないので、いつも灯台だったという。

上鶴先生は、新卒でなにもかも初体験であったので、無我夢中で過した一年間で、とてもいい学校で家庭的だったと述懐していた。

ツワブキの花咲く深島の秋、一年中鶯が鳴き林の中から小鳥のさえずりが、暖竹が潮風に鳴り、オオシキ網、イカツリ、魚釣りと魚も豊富であった深島をなつかしんでいた。

教育事務所から教育現場視察の計画訪問があり、新卒であったので緊張したが、仲間の先生方のあたたかい支えが、とてもうれしかったと話してくれた。

上鶴先生にとって、深島小学校勤務は、淋しさや、悲壮感もなく初任地深島校での思い出は一入深い忘れ難い青春の一ページだったと熱っぽく話してくれた。

深　島　に　て

蒲江港から南方八・五粁離れた日向灘に浮かぶ孤島深島

・横たわる離島の稜線妖しげな
　裸婦像のごと海霧の中

七月十四日、くもり空を気づかいながら、町役場の下から深島往きの定期船に乗りこんだ。白いスマートな高速艇は、リアス式海岸を右に左に舵をとりながら、蒲江湾一帯に広がる養殖漁場のいけすの中を巧みに、運行湾

外に出る。

・ま白なる高速艇は心地よく
　はるかに浮かぶ深島目ざす

船窓から見える沈降海岸の断崖・海食崖・岩礁地帯・人を全く寄せつけない海食洞門など海岸美を十分に楽しませてくれる。

到着の汽笛が鳴り深島港に到着した。所要時間は僅か二十五分間だった。澄切(すみき)った紺碧の海が印象的だった。

早速、休校中の深島小・中学校を訪う。だらだら坂を登って行く。鶯がしきりに鳴いている。島民の飲料水のダム。咲き残った紫陽花が色あせている。ぽつりぽつりと雨が降って来た。やがて小高い丘に白い鉄筋校舎とグランドが見えた。きょうは島の人達の奉仕作業日で草とりをしていた。

・潮風の匂う道辺に浜木綿は
　蕊をほどきておおらかに咲く

校舎に入る。なにもかもそのままの状態であるが、心なしか子どものいない学校は活気がないように思えた。一日も早く開校の日を願って止まない。

公私共々御多忙の中、地元の清水さんに、深島について二時間位話していただいた。雨は烈しく窓をたたいた。しばらくすると雨もどうにか上がり、清水さんも同行して深島灯台へ向かった。山々の木々は塩害・酸性雨の被害がひどく立枯れ状態であった。昔の段畑は荒れるにまかせていた。

・石垣の残りし島の段畑
　荒るるにまかせ暖竹茂る

途中「役の行者」の祠に立寄る。アコウ木が茂ってその根元の古井戸には草が生い茂り野生化した梨の木に小さな実がついていた。灯台までの道は、よく手入れされ、野かんぞうが咲き、つわぶきの葉っぱが艶々と群生し鳥の囀りがひっきりなしに聞こえ、時折雉にも出会った。

・断崖に無人灯台そそり立つ
　白き館は潮騒の中

この灯台は、子ども達の唯一の遠足の場所と聞いていたが、灯台のまわりは狭く、海に面した方は断崖絶壁で、身のすくむ思いがする。四囲の展望・眼下の大小の岩場にはりついて見える赤いヤッケの釣人、打ち寄せる礁の

白波、海上を大きく輪を描くとんびの舞いしばし俗界を脱した気分にしたる。

深島小学校に勤務された男の先生は、身心鍛練のため子どもといっしょに雨天以外は灯台までかけ足で往復したという。

公民館で昼食、深島もあちこちに空家が。

・人絶えて久しく経ちしこの家の
　狭庭にひそと浜木綿淋し

深島灯台

清水さんのお話を聞きながら深島を愛して止まないお気持が切々と伝わってくる。そして、ひときわ力強く「どんなことがあっても深島小・中学校の灯は消さない」といわれた。私もこの深島に小・中学校の存続を願っているが少子時代、島を出られた方、人口減の現在、大きな壁を感じる。

又、離島深島に生を享けたことに誇りをもった清水さんの生きざまに感動させられた。

つわぶきの花で埋まる秋の深島に、又私は是非出向きたいと思った。

出航までの時間、浜辺で記念の貝殻を拾った。

・拾い来し貝がら耳にあてて聞く
　かすかに聞こゆ秋の波音

参考資料　蒲江町誌
資料提供　蒲江町教育委員会
聞取り　清水　禎一氏
　　上鶴　聡子氏
訪問地　蒲江町　深島